

編集後記：新型コロナウイルスの流行抑制のため、小職の勤務先である気象庁でも大規模にテレワークが導入されました。もともと仕事の大半はメールのやり取りで済んでいたのに、職場のメールを自宅からでも送受信できるようになり、その点での不便はありませんでした（職場のメールを自宅や携帯端末で読み書きできるのが以前から当たり前だった他の職場の方には、我々の職場は今まで理解しがたい状況だったのかも知れませんが…）。

とはいえ、仕事を進めるにあたっては、メールだけでは済まないものもやはりあり、打合や調整作業、出張などで対応していた仕事をテレワークでも行う必要がありました。そこでそれらの仕事をウェブ会議で済ますためのテレワークソフトの出番となります。小職の所属する気象衛星課は、これまでも外国の気象機関の方や、衛星を運用するにあたってお世話になっている衛星運用会社・メーカーの方と、ウェブ会議システムを使った打合は行っていたので、同じ職場のもの同士でも、オンラインで打合や調整作業を行うのは比較的容易に取り組めました。

むしろテレワーク開始以前に比べて劇的に変化したのが、同じ職場の中での情報共有のあり方です。これまでは同じ職場でも、担当する業務内容が異なると、ともすれば隣で今現在、何をやっているのかつかみ切れていない場合もありました。それがテレワークソフトを使って、自分の業務内容を職場の掲示板に投稿し、同僚に意見を求めたり、了解を得たりといった作

業をお互いに繰り返すうちに、職員同士の情報の共有がびっくりするほど効率的に進み、職場の抱えるいろいろな課題に職場全体で取り組むことができました。

また、今回は日本中、世界中で同様の状況になったため、国際会議等も軒並みオンライン会議になりました。出張先で他国からの参加者と歓談しつつ会議を行うことは不可能になりましたが、その分、これまでは会議には参加できなかった職員まで、自宅から参加することができました。また、会議進行中も仲間内でチャットを用いて意見交換をすることができるため、刻々と変化する議事内容に容易に対応することができました。これもまた、新たな発見でありました。

禍福は糾える縄の如し、人間万事塞翁が馬とはよく言いますが、まさに今回のコロナ禍の中でも、少しはよいこともあるのだなと思った次第です。今後はこのような良い点を活かしつつ、テレワークと実作業をミックスした業務形態になるのでしょうか。

さて、本稿執筆時点は10月中旬ですが、今月末には気象学会の秋季大会がオンラインで開催されます。5月の春季大会では、現地開催は中止となったため、大会をすべてオンラインで開催するのは今回が初めてとなります。講演者、参加者、準備いただいている皆さん、全員が、オンラインでも実施できてこんなによかったねと言えるような大会になることを、小職も祈念しております。

（別所康太郎）